

サッカー選手の攻撃行動に及ぼすチームの 動機づけ雰囲気の影響

隠岐の島町立都万小学校 石倉 啓順
島根大学教育学部 伊藤 豊彦

Effects of Motivational Climate in a Sports Club on Aggressive Behavior among Soccer Players

Takayuki ISHIKURA (Tsuma Elementary School, Okinoshima-cho) and
Toyohiko ITO (Faculty of Education, Shimane University)

キーワード：動機づけ雰囲気、攻撃性、サッカー選手

Key Words : motivational climate, aggressive behavior, soccer players

問題と目的

体育や運動部活動には、健康の保持・増進、体力の向上といった身体的側面に加え、社会性や道徳性の発達といった人格形成の側面に寄与することも期待されている。具体的には、スポーツパーソンシップ (sportspersonship) やフェアプレー精神の涵養のことであり、これらを強調することがスポーツの教育的機能の1つとして重視されてきた。

しかしながら、現実のスポーツ場面では、選手のみならず指導者や親が勝利を追求するあまり、反スポーツパーソンシップ的行動やアンフェアな攻撃的行動がしばしば見受けられるのも事実である。したがって、スポーツの持つ教育的機能を高めるためには、このような行動をいかにしてコントロールし、抑制していくかが重要とされる。

ところで、攻撃性とは、一般に、被害の回避、強制、制裁、印象形成の4つの機能を持つとされ、古くは、本能説や欲求不満攻撃説のように1つの要因からその発生メカニズムを説明しようとする試みが行われてきた(阿江、

2008a)。しかし、多くの実証的研究が新たな知見を提示するにつれて、単一の要因だけでなく、個人的要因、社会的要因、状況要因など様々な要因が攻撃行動を規定することが明らかにされてきた。

また、スポーツにおける攻撃行動に関する研究は、前述したような理論的基盤を背景としながら、①スポーツの参加が個人内の攻撃性に及ぼす影響、②攻撃行動とパフォーマンスとの関係、③競技場面における攻撃行動を規定する要因という3つの問題を扱ってきたが、十分明らかにされているとは言い難い状況にある。さらに、スポーツにおける攻撃性は、人を直接傷つける身体的攻撃や人をののしったり、嫌がることを言って相手を傷つける言語的な攻撃などの抑制されるべき攻撃性と闘志あふれるプレーやラフプレーなどスポーツの醍醐味ともいえる攻撃性など、その性質が多様であることが指摘されている(阿江、2008b)。

たとえば、杉山(1990)は、ラグビー、サッカーなどのコンタクト・スポーツに参加する862名を対象に攻撃性を検討した結果、次の7つの因子を抽出している。すなわち、①挑発的な

意味を含み、身体によって相手を攻撃するという攻撃形態を表していると考えられる「身体的攻撃性因子」、②相手の攻撃行動に対して、やり返すなどの報復行動を表していると考えられる「報復的攻撃性因子」、③スポーツ場面において、攻撃的とされるプレーの形態を表していると考えられる「攻撃的プレースタイル因子」、④不利な状態、競り合いの場面における行動を反映していると考えられる「闘志因子」、⑤達成動機の研究で指摘される達成行動の基準を満たしていると考えられる「競技達成行動因子」、⑥外顯的行動よりも、情緒的状态を表していると考えられる「情緒的攻撃性因子」、⑦困難な状況におかれた場合の反応を表すと考えられる「困難の克服因子」、である。そして、身体的接触が多々あるコンタクト・スポーツにおける攻撃性の特徴として、プレーにおいて攻撃的であるということは、ラフプレーや殴るなどの身体的攻撃とはまったく関係なく、達成動機との関連が極めて高いと述べている。加えて、競技場面における攻撃性に関する性差を検討した結果、身体的攻撃性、報復的攻撃性、攻撃的プレースタイル、情緒的攻撃性において全体的に男性の方が高いが、種目別にみると必ずしもこれらが高いとはいえないことから、心理的なレベルでは女性の方が男性よりも攻撃的になることがあるといったスポーツにおける攻撃性の特徴についても明らかにしている。

つまり、スポーツにおける攻撃性を考える場合、激しいタックルをする、徹底して攻めるといった積極的なプレーに貢献すると考えられる攻撃性と、ラフプレー、暴力行為などの激しい反則行為を含み、アンフェアなプレーや反スポーツパーソナリティ的行動の原因となる可能性のある攻撃性の2つのタイプを区別しておく必要性が示唆されるのである。

以上のように、スポーツにおける攻撃性は多様であることがわかるが、スポーツパーソン

シップの精神の涵養やフェアプレーの促進といった立場からは、スポーツ場面で生じる暴力行為といったネガティブな攻撃行動をいかに制御していくかが重要な課題であると考えられる。

ところで、このような問題に関して、最近、達成目標理論からのアプローチが試みられるようになってきた。達成目標理論とは、Nicholls (1989) らによって提唱された理論であり、達成場面で人が設定する目標の種類やその意味づけが動機づけを規定するという立場である。達成目標としては、一般に、他者との比較を通して自分の能力の高さを誇示したいという遂行(成績)目標と他者とは独立して自らのスキルの獲得や向上を目標とする熟達(課題)目標の2つがあり、遂行目標は不適応的な動機づけパターンを導くと考えられている。

たとえば、Duda, Olson, & Templin (1991) は、123名の高校バスケットボール選手を対象に、達成目標志向性と反スポーツパーソナリティ的行動及び攻撃行動との関係を検討した結果、課題志向が弱く自我志向が強い選手ほど反スポーツパーソナリティ行動を容認する傾向が高いことを明らかにし、自我志向が攻撃的行動と関連していることを報告している。

また、競技における攻撃性を規定する要因として、チームの環境要因(道徳的風土、コーチの目標志向性)と選手の目標志向性を取り上げたStephens & Bredemeier (1996) 及びStephens (2001) は、選手の攻撃行動が本人の目標志向性よりもチーム内の基準やコーチといった文脈要因からの影響を受けることを明らかにしている。

一方、Guivernau & Duda (1998) の研究をはじめとして、チームといった集団が持つ目標志向性の傾向、すなわち動機づけ雰囲気(motivational climate)の視点からも攻撃性の問題が検討されるようになってきた。

たとえば、Miller, Roberts, & Ommundsen

(2004) は、ノルウェーの 12 歳から 14 歳までのサッカー選手 714 名を対象に、チームの動機づけ雰囲気（モチベーション）がスポーツパーソンシップに及ぼす影響を検討した。その結果、スポーツパーソンシップ得点において性差が認められるとともに、チームの熟達雰囲気（熟達感）がスポーツパーソンシップを促進させる傾向にあることを明らかにしている。

達成目標理論は動機づけにかかわる概念であるが、環境要因としての動機づけ雰囲気と競技場面における攻撃性との関連性を検討することは、スポーツにおける攻撃性の抑制・制御といった視点から有益な示唆が得られることが期待できる。

しかしながら、以上の研究はすべて欧米の選手を対象としたものであり、我が国においては、スポーツにおける攻撃性にかかわる問題を動機づけ雰囲気の視点から検討したものは、現時点では見当たらない。

そこで、本研究は、サッカー選手を対象として、チームの動機づけ雰囲気（モチベーション）の認知と競技場面における攻撃性との関連性を明らかにすることを目的として行われた。

方 法

1. 調査対象

調査対象は、中国地区の 3 つの国立大学サッカー部所属の男子選手 80 名、及び中国地区の 3 つの社会人サッカークラブと島根県立高校のサッカー部に所属する女子選手 77 名の計 157 名である。

2. 調査内容

質問紙は、年齢、性別、競技経歴、ポジション、競技年数、レギュラーの有無等の基本的属性のほか、チームの動機づけ雰囲気と競技場面における攻撃性に関する調査項目より構成され

ている。

1) チームの動機づけ雰囲気

磯貝ほか（2008）が作成した動機づけ雰囲気尺度を参考に、サッカーの競技場面用に修正したものを使用した。①指導者の熟達志向、②熟達志向、③協同、④公平さ、⑤指導者の成績志向、⑥成績志向、⑦失敗の恐れ（7 つの下位尺度から構成され、各 4 項目、計 28 項目に対し、「1. まったくあてはまらない」から「5. よくあてはまる」までの 5 件法で回答を求めた。

具体的な項目例は、以下の通りである。「監督・コーチは、結果が悪くても、頑張ったり、努力したりする人をほめます（指導者の熟達志向）」、「私のチームでは、技術の習得ができるかどうかではなく、頑張って練習するかどうかが大切にされます（熟達志向）」、「チーム練習では、チームのみんなが協力しています（協同）」、「練習や試合では、チームのみんなが平等です（公平さ）」、「監督・コーチは得点や勝敗のことばかり気にします（指導者の成績志向）」、「チーム練習では、うまい人がみんなから注目されます（成績志向）」、「チームの練習で失敗するとチームメイトからバカにされるので、みんなびくびくしています（失敗の恐れ）」。

2) 選手の攻撃性

競技場面における選手の攻撃性については、杉山・杉原（1989）の研究において抽出された身体的攻撃性、情緒的攻撃性、闘志、報復的攻撃性の 4 つの尺度と、杉山（1990）が追加した、攻撃的なプレースタイル、競技達成行動、困難の克服の計 7 つの尺度を採用した。各 5 項目、計 35 項目からなり、「1. まったくあてはまらない」から「5. よくあてはまる」までの 5 件法により回答を求めた。

具体的項目例を以下に示した。「自分のほうからラフなプレーをしかけることがたまにある（身体的攻撃性）」、「競技中、もし殴られるようなことがあれば殴り返してやる（報復的攻

撃性)、「試合では徹底して攻めまくる方である(攻撃的プレースタイル)」、「相手が強いほど、相手に向かっていく方である(闘志)」、「競技を行うとき、自分には少し難しいような目標をたてる(競技達成行動)」、「競技中、他の選手にからかわれると、すぐにカッと頭にくる(情緒的攻撃性)」、「試合が不利になると、あきらめてしまう(反転項目)(困難の克服)」。

3. 調査期間

調査は2008年11月8日から12月5日にかけて実施した。

4. 調査方法

調査者がチーム代表者に調査の主旨と方法を説明した後に、各チームに調査用紙を配布し、後日回収した。

5. 統計処理

結果の処理は、すべてSPSS12.0J for Windowsを用いて行った。

結果と考察

1. チームの動機づけ雰囲気の特徴について

まず、チームの動機づけ雰囲気の特徴を明らかにするために、男女別に動機づけ雰囲気得点を算出し、t検定を行った(表1)。

表1より、「指導者の熟達志向」($t=-5.03$, $df=155$, $p<.01$)、「熟達志向」($t=-3.84$, $df=155$, $p<.01$)、「協同」($t=-5.09$, $df=155$, $p<.01$)、「公平さ」($t=-3.06$, $df=155$, $p<.01$)、「指導者の成績志向」($t=3.63$, $df=155$, $p<.01$)、「成績志向」($t=4.31$, $df=155$, $p<.01$)、「失敗の恐れ」($t=8.66$, $df=155$, $p<.01$)において有意差が認められた。

これは、「指導者の成績志向」、「成績志向」、「失敗の恐れ」において、男子選手が女子選手よりも高い得点を示しているのに対して、「指導者の熟達志向」、「熟達志向」、「協同」、「公平さ」においては、女子選手が男子選手よりも高い傾向にあることを示している。

以上のことから、男子のチームは女子チームに比較して、勝つことを重視する意識が選手・コーチともに高いことや、ポジション争いが激しく、失敗できないという高い緊張感の下でプレーしていることが示唆される。

それに対して女子チームは、勝敗よりも個人やチームの技術の向上に対する意識が高く、チーム全体でうまくなろうというという雰囲気が高い傾向にあることが窺える。

2. 競技場面における攻撃性の特徴について

競技場面における攻撃性の特徴を明らかにするために、男女別に攻撃性得点を算出し、t検定を行った(表2)。

表1. チームの動機づけ雰囲気得点(平均・標準偏差)

	男子選手 (n=80)	女子選手 (n=77)	t 値
指導者の熟達志向	3.6(.69)	4.1(.70)	-5.20**
熟 達 志 向	3.5(.74)	3.9(.58)	-3.86**
協 同	3.4(.75)	4.0(.66)	-5.10**
公 平 さ	3.0(.63)	3.3(.59)	-3.07**
指導者の成績志向	3.1(.61)	2.8(.43)	3.66**
成 績 志 向	3.2(.67)	2.8(.48)	4.31**
失 敗 の 恐 れ	3.2(.64)	2.4(.50)	8.71**

** $p<.01$

表 2. 攻撃性得点 (平均・標準偏差)

	男子選手 (n=80)	女子選手 (n=77)	t 値
身体的攻撃性	2.8(1.2)	1.6(.63)	7.51**
報復的攻撃性	2.9(.74)	2.9(.6.9)	1.68
攻撃的プレースタイル	3.1(.72)	3.3(.43)	-2.42*
闘志	3.4(.92)	3.4(.74)	-0.53
競技達成行動	4.1(.76)	3.6(.69)	4.89**
情緒的攻撃性	3.2(.75)	2.9(.70)	2.86**
困難の克服	3.1(.55)	3.4(.48)	-2.75**

* $p < .05$, ** $p < .01$

表 2 より、「身体的攻撃性」($t=7.43$, $df=155$, $p < .01$)、「競技達成行動」($t=4.88$, $df=155$, $p < .01$)、「情緒的攻撃性」($t=2.86$, $df=155$, $p < .01$)、「困難の克服」($t=-2.75$, $df=155$, $p < .01$)、「攻撃的プレースタイル」($t=-2.40$, $df=155$, $p < .05$)、において有意差が認められた。

これは、「身体的攻撃性」、「競技達成行動」、「情緒的攻撃性」においては、男子選手が女子選手よりも得点が高く、「攻撃的プレースタイル」、「困難の克服」においては、女子選手が男子選手よりも得点が高いことを示している。

このことより、男子選手は女子選手よりも身体的にも情緒的にも相手に手を出してしまったり、すぐに腹を立ててしまったりとプレーヤーとして負の攻撃的な面が多いのに対して、女子選手は、自分から積極的にプレーしたり、最後

まであきらめずにプレーするなどのプレーヤーとしての肯定的な攻撃性の側面が高いことが示唆される。また、女子選手より男子選手のほうが「競技達成行動」得点が高いことから、男子選手のほうが競技者として成功したい、みんなから認められたいという思いが強いことが窺える。

3. チームの動機づけ雰囲気と競技場面における攻撃性との関連について

チームの動機づけ雰囲気と競技場面における攻撃性との関連を明らかにするために、攻撃性の各下位尺度を目的変数、チームの動機づけ雰囲気の各下位尺度を説明変数とした重回帰分析を行った (表 3)。

重相関係数をみると、身体的攻撃性 ($R=.544$, $p < .01$)、攻撃的プレースタイル ($R=.715$,

表 3. チームの動機づけ雰囲気と競技場面における攻撃性との関係 (重回帰分析の結果)

(動機づけ雰囲気)	(競技場面における攻撃性)						
	身体的攻撃	報復的攻撃	攻撃的プレースタイル	闘志	競技達成行動	情緒的攻撃	困難の克服
指導者の熟達志向	-.089	-.148	-.280	.040	.069	.091	.237*
熟達志向	-.149	-.027	.192*	.147	.060	-.007	.083
協同	-.269**	.169	.415**	.085	-.028	-.060	.053
公平さ	.188*	-.034	.146	-.072	-.041	-.147	-.198*
指導者の成績志向	.105	.060	.292**	-.014	.204*	.166*	.024
成績志向	-.019	-.034	.087	.268**	.200*	.003	-.088
失敗の恐れ	.334**	-.062	.001	-.166*	.099	.153	-.160*
重相関係数 (R)	.544**	.183	.715**	.271	.399**	.293*	.364**

+ $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

$p < .01$)、競技達成行動 ($R = .399, p < .01$)、困難の克服 ($R = .364, p < .01$) に有意な係数が認められ、「情緒的攻撃性」 ($R = .239, p < .10$) では有意な傾向が求められた。なお、報復的攻撃性と闘志では有意な重相関係数は認められなかった。

つぎに、標準偏回帰係数をみると、まず、攻撃性のネガティブな側面と考えられる身体的攻撃性に対しては、協同的雰囲気有意な負の係数 ($\beta = -.269, p < .01$) が、失敗の恐れには有意な正の係数 ($\beta = .334, p < .01$) がそれぞれ認められた。これは、チーム内の協同的雰囲気が高いと認知されるほど身体的攻撃性が抑制されるのに対して、失敗の恐れが高いと認知されるほど身体的攻撃性が促進される傾向にあることを示している。

また、攻撃的プレースタイルに対しては、熟達志向的雰囲気、協同的雰囲気、指導者の成績志向的雰囲気にそれぞれ有意な正の係数 (順に、 $\beta = .192, p < .05$; $\beta = .415, p < .01$; $\beta = .292, p < .01$) が認められ、これらの雰囲気が高いチームほど攻撃的プレースタイルが促進される傾向にあることが示唆される。

さらに、競技達成行動に対しては、指導者の成績志向的雰囲気と成績志向的雰囲気にそれぞれ有意な正の係数 (順に、 $\beta = .204, p < .05$; $\beta = .200, p < .05$) が認められた。選手と指導者の成績志向が強いチームに所属している選手ほど競技達成行動が強い傾向にあることが窺える。

最後に、困難の克服に対しては、指導者の熟達志向的雰囲気に有意な正の係数 ($\beta = .237,$

表 4. 男子選手におけるチームの動機づけ雰囲気と競技場面における攻撃性との関係 (重回帰分析の結果)

〈動機づけ雰囲気〉	〈競技場面における攻撃性〉						
	身体的攻撃	報復的攻撃	攻撃的プレースタイル	闘志	競技達成行動	情緒的攻撃	困難の克服
指導者の熟達志向	-.061	-.125	-.035	-.112	.079	-.006	.162
熟達志向	-.151	-.030	.164	.245	.231	.049	.158
協同	-.287*	.263*	.369*	.105	-.207	-.203	.092
公平さ	.209	-.120	.193	-.183	.122	-.039	-.311
指導者の成績志向	.107	-.051	.229*	.131	.214	.116	.051
成績志向	-.045	-.015	.068	.292*	.226*	.064	-.093
失敗の恐れ	.263*	-.033	-.030	-.204	-.165	.127	-.223
重相関係数 (R)	.393*	.261	.700**	.325	.422*	.259	.375

+ $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

表 5. 女子選手におけるチームの動機づけ雰囲気と競技場面における攻撃性との関係 (重回帰分析の結果)

〈動機づけ雰囲気〉	〈競技場面における攻撃性〉						
	身体的攻撃	報復的攻撃	攻撃的プレースタイル	闘志	競技達成行動	情緒的攻撃	困難の克服
指導者の熟達志向	.061	-.137	-.011	.204	.340*	.230	.275
熟達志向	-.083	.025	.171*	.081	-.133	-.143	.028
協同	-.363*	.052	.464**	.073	.337*	.284+	.026
公平さ	.193	.137	.125	.006	-.255*	-.279*	-.055
指導者の成績志向	.008	.230*	.390**	-.108	.152	.323*	-.029
成績志向	.093	-.129	.128	.202	.192	-.172	-.091
失敗の恐れ	-.050	-.049	.155	-.028	-.021	.146	.047
重相関係数 (R)	.324	.253	.764**	.360	.480**	.406*	.302

+ $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

$p<.05$)が認められた。指導者が熟達目標を持って指導していると選手から認知されることが選手自身の困難の克服を促進させることが示唆される。

つぎに、前述した競技場面における攻撃性の検討において性差が認められたことから、動機づけ雰囲気と攻撃性との関連を男女別に検討することとした。表4及び表5は重回帰分析の結果を、図1及び図2はそれらを図示したものである。

まず、表4及び図1より、男子選手では、「攻撃的プレースタイル」と「競技達成行動」に有意な係数（順に、 $R=.700, p<.01$ ； $R=.422, p<.01$ ）が、「身体的攻撃性」には有意な傾向を示す係数（ $R=.393, p<.10$ ）が認められた。

つぎに、標準偏回帰係数をみると、攻撃的プレースタイルに対して、協同的雰囲気と指導者の成績志向的雰囲気に有意な正の係数（順に、 $\beta=.369, p<.05$ ； $\beta=.229, p<.05$ ）が認められた。これは、チーム内の協同的雰囲気と指導者の成績志向的雰囲気が高いと認知されるほど攻撃的プレースタイルが促進される傾向にあることを示している。

また、競技達成行動に対して、成績志向雰囲気が有意な傾向を示す正の係数（ $\beta=.226, p<.10$ ）が認められ、成績志向的雰囲気が競技達成行動を促進させることを示している。

さらに、身体的攻撃性に対しては失敗の恐れが正の係数（ $\beta=.263, p<.10$ ）を協同的雰囲気が負の係数（ $\beta=-.287, p<.05$ ）をそれぞれ

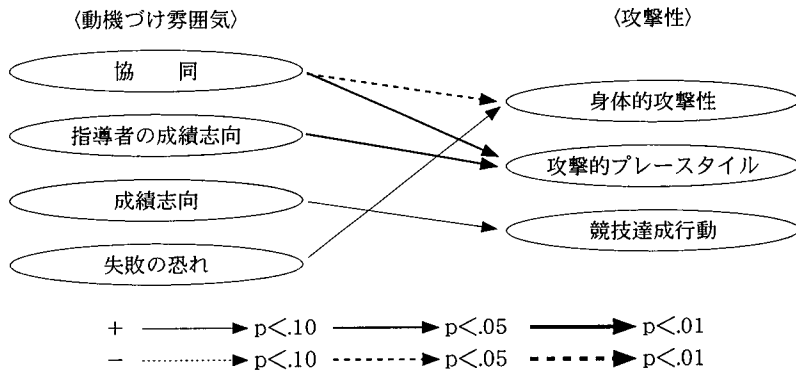


図1. 男子選手におけるチームの動機づけ雰囲気と競技場面における攻撃性との関係

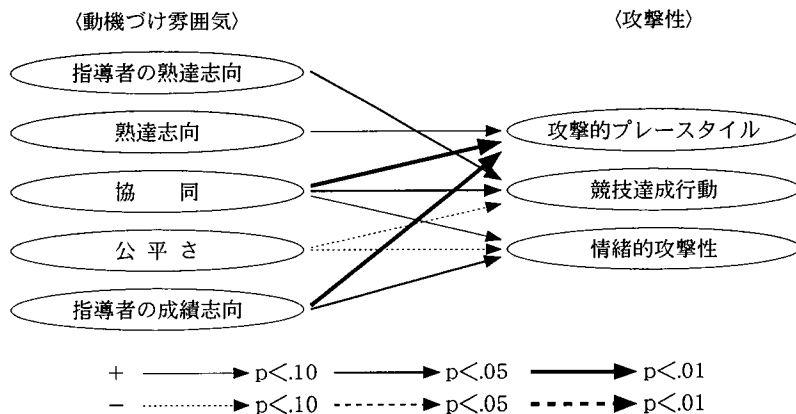


図2. 女子選手におけるチームの動機づけ雰囲気と競技場面における攻撃性との関係

れ示した。これは、チーム内に協同的雰囲気が高いと認知されるほど身体的攻撃性が抑制される傾向にあるのに対して、失敗を恐れる雰囲気が高いほど身体的攻撃性が促進される傾向にあることを示している。

ここで、攻撃的プレースタイルや競技達成行動は攻撃性の肯定的側面であるのに対して、身体的攻撃性は抑制されるべき否定的側面であると考えられるが、本研究結果は、チーム内の雰囲気を協同的なものにすることで身体的攻撃性を抑制できる可能性を示しているという点で興味深い。

一方、女子選手では、表5及び図2より、「攻撃的プレースタイル」($R=.764, p<.01$)と「競技達成行動」($R=.480, p<.01$)に有意な重相関係数が、「情緒的攻撃性」($R=.406, p<.10$)には有意な傾向を示す係数が認められた。

つぎに標準偏回帰係数を検討した結果、まず、攻撃的プレースタイルでは、協同的雰囲気、指導者の成績志向的雰囲気、及び熟達志向的雰囲気にそれぞれ有意な係数(順に、 $\beta=.464, p<.01$; $\beta=.390, p<.01$; $\beta=.171, p<.10$)が認められた。これは、女子のチームでは、チームが協同的で熟達志向的であり、指導者が成績志向的であるほど攻撃的プレースタイルが促進されることを意味している。

また、競技達成行動では、指導者の熟達志向的雰囲気と協同的雰囲気には有意な係数(順に、 $\beta=.340, p<.05$; $\beta=.337, p<.05$)が、公平さには有意な傾向を示す係数($\beta=-.255, p<.10$)がそれぞれ認められた。指導者が熟達志向的であり、協同を重視するチームであるほど選手の競技達成行動が高まるのに対して、公平さが欠如しているチームでは、選手の競技達成行動が抑制されることが示唆される。

最後に、攻撃性のネガティブな側面と考えられる情緒的攻撃性では、指導者の成績志向的雰囲気に有意な係数($\beta=.323, p<.05$)が、協

同と公平さには有意な傾向を示す係数(順に、 $\beta=.284, p<.10$; $\beta=-.279, p<.10$)がそれぞれ認められた。以上の結果は、指導者の成績志向的雰囲気とチーム内に協同的雰囲気が強いほど女子選手の情緒的攻撃性が促進されるのに対して、チーム内に公平さが担保されるほど情緒的攻撃性が抑制されることを示唆している。

さて、チーム内の動機づけ雰囲気と選手の攻撃性との関連を検討してきたが、ネガティブな攻撃性の抑制という視点から以上の結果をみると、まず、男子選手では、チーム内に練習や試合での失敗が脅威とならない雰囲気と協同的雰囲気を作り上げることが身体的攻撃性を抑制する点で重要であることが示唆される。また、女子選手では、チーム内の公平性を担保し、指導者が成績志向を強めないことが情緒的攻撃性を抑制するうえで重要なことが示唆されたといえる。つまり、本研究結果は、チーム内の動機づけ雰囲気を適切なものにするすることで、身体的攻撃性や情緒的攻撃性といった反スポーツパーソナリティ行動を抑制できる可能性があることを示しているのである。

しかしながら、以上の結果は、あくまで静的な関係の分析にとどまっていることから、今後、各チームの動機づけ雰囲気に介入することで、競技場面における攻撃性をコントロールできるかどうかを検討する必要がある。

また、本研究では、高校生、大学生、及び社会人のサッカー選手を対象としたが、その数は必ずしも十分なものとはいえない。特に、山陰地域における女子サッカー選手は少なく、本研究においても高校生及び社会人に限定せざるを得なかったことから、本研究結果を一般化するには慎重であらねばならない。

さらに、チーム内の動機づけ雰囲気と選手の攻撃性との関連には、発達段階や競技レベルによる影響が予測される。これらを今後の検討課題としたい。

要 約

本研究の目的は、チームの動機づけ雰囲気の認知と競技場面における攻撃性との関連性を検討することであった。サッカー選手157名を対象に、チームの動機づけ雰囲気と選手の攻撃性との関連を検討した主な結果は、以下の通りである。

1) 男子選手の場合、チーム内において、協同的雰囲気が高く、失敗の恐れのない低い雰囲気を作り出すことが競技場面における身体的攻撃性を抑制することが示唆された。

2) 女子選手では、指導者が成績志向的雰囲気を高めず、チーム内の公平さに配慮することで情緒的攻撃性を抑制する可能性があることが示唆された。

引 用 文 献

- 阿江美恵子 (2008a) 攻撃性. 日本スポーツ心理学会 (編) スポーツ心理学事典. 大修館書店: 東京, pp.323.
- 阿江美恵子 (2008b) スポーツの醍醐味としての攻撃性. 日本スポーツ心理学会 (編) スポーツ心理学事典. 大修館書店: 東京, pp.324.
- Duda, J. L., Olson, L. K., & Templin, T. J. (1991) The relationship of task and ego orientation to sportsmanship attitudes and the perceived legitimacy of injurious acts. *Research Quarterly for Exercise and Sport*, **62**, 79-87.
- Guivernau, M. & Duda, J. L. (1998) Integrating concepts of motivation and morality: The contribution of norms regarding aggressive and rule-violating behaviors, goal orientations, and the perceived motivational climate to the prediction of athletic aggression. *Journal of Sport & Exercise Psychology*, **20**, S13.
- 磯貝浩久・伊藤豊彦・西田 保・佐々木万丈・杉山佳生・渋谷崇行 (2008) 体育における動機づけ雰囲気測定尺度作成の試み. 日本スポーツ心理学会第35回大会発表抄録集, 194-195.
- Miller, B. W., Roberts, G. C. & Ommundsen, Y. (2004) Effect of motivational climate on sportspersonship among competitive youth male and female football players. *Scandinavian Journal of Medicine & Science in Sports*, **14**:193-202.
- Nicholls, J. G. (1989) Conceptions of ability and achievement motivation: A theory and its implication for education. In S. G. Paris, G. M. Olson, & H. W. Stevenson (Eds), *Learning and motivation in the classroom*. Lawrence Erlbaum Associates, Pp. 211-237.
- 杉山哲司 (1990) コンタクト・スポーツにおける攻撃性の性差の検討—競技場面、日常場面における攻撃性の因子構造の男女比較. 山梨英和短期大学紀要, **24**, 129-152.
- 杉山哲司 (1996) コンタクトスポーツにおける攻撃行動 - その特質と性差. 山梨英和短期大学紀要, **30**, 163-172.
- Stephens, D. E. (2001) Predictors of aggressive tendencies in girls' basketball: An examination of beginning and advanced participants in a summer skills camp. *Research Quarterly for Exercise and Sport*, **72**, 257-266.
- Stephens, D. E. & Bredemeier, B. (1996) Moral atmosphere and judgments about aggression in girls' soccer: Relationships among moral and motivational variables. *Journal of Sport and Exercise Psychology*,

18, 158-173.

【付記】

本研究の実施に際しては、科学研究費補助金・
基盤研究（C）（課題番号：19500507）の助成
を受けた。